

## 命令文の統語構造と機能範疇ModP

田中, 公介  
九州大学大学院人文科学府 : 博士課程

<https://doi.org/10.15017/6790325>

---

出版情報 : 九大英文学. 47, pp.117-136, 2004. The Society of English Literature and Linguistics,  
Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



## 命令文の統語構造と機能範疇 ModP\*

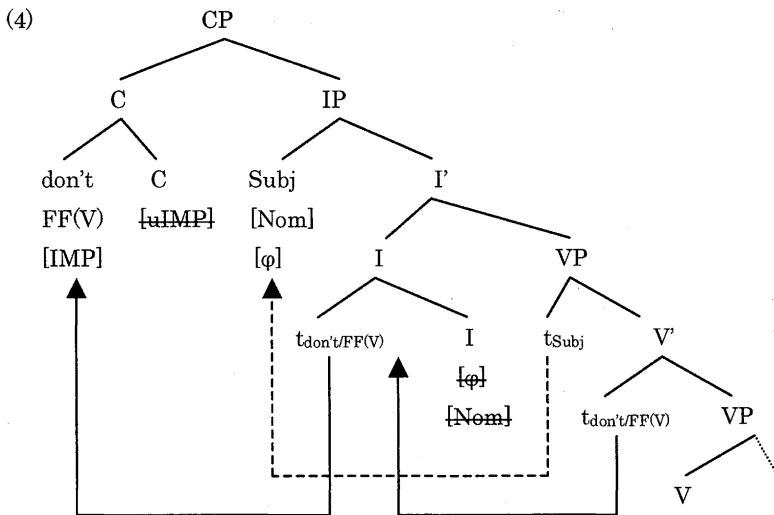
田中 公介

### 1. はじめに

本論文は、英語命令文の統語構造に関する分析を試みるものである。具体的には、英語命令文の統語構造は CP であり、その主要部 C<sup>0</sup> に LF インターフェイスにおいて解釈可能な統語素性[IMP]が存在する事を保障する統語的メカニズムを提唱した田中 (2003)の分析から、その統語構造を詳細に分析する事を試みる。まず田中 (2003)では、(1)、(2)、(3)に示した英語命令文の主たる統語的特徴が、Chomsky (1995)における素性照合理論を反映した(4)のような統語構造を仮定する事によって説明されると考えた。

- (1) 動詞が原型で生起する
  - a. Somebody help me!
  - b. \*Somebody helps me!
  
- (2) 否定文の場合に義務的に do が現れる
  - a. Don't forget my birthday!
  - b. Don't be messing around when the bell rings!
  - c. \*Be not messing around when the bell rings!
  
- (3) 顕在的な主語の生起が談話上の聞き手の解釈を担う名詞句に制限される
  - a. You take out the trash!
  - b. Everyone write to Congress about this atrocity!
  - c. \*I/\*We go to the school at once!
  - d. \*He/\*They speak English much fluently!

e. \*John take care for yourself!



具体的に(4)の統語構造に関して概観していく。田中 (2003)では、英語命令文の統語構造における各機能範疇の主要部 C<sup>0</sup>-I<sup>0</sup>-V<sup>0</sup>間には特別な選択関係が形成されているものと考え、その統語的な認可手段として、本動詞の形式素性、もしくは助動詞 don't の何れかの解釈可能な[IMP]素性を担う要素が C<sup>0</sup>へと移動を行う統語メカニズムを提案した。<sup>1</sup>また命令文の主語は他の文タイプに生起する主語同様 VP 内に基底生成し、そこから IP の指定部へと移動し主格を付与されており、I<sup>0</sup>と二人称の人称素性に関する一致を起こす。以上の統語素性間の照合が統語論において成される事によって、LF インターフェイスにおいて解釈可能な[IMP]素性が導かれると共に、上記(1)-(3)までの英語命令文の特徴が説明されると考えた。

本論文では(4)のような英語命令文の統語構造に若干の修正を加えた英語命令文の統語構造を提案すると共に、その構造において現われると仮定する法助動詞句 ModP が言語間でパラメータ化されているという仮説を提唱し、より広範囲な言語の命令文の統語構造が説明される事を示す。そこでまず次

章では、(4)の統語構造を軸とし、命令文が発話者の「命令」という意の心理的なモダリティを有する文タイプである事を踏まえ、その統語構造に機能範疇としての法助動詞句 ModP が投射すると仮定する分析を提示する。具体的には、この ModP の主要部位置には解釈可能な[IMP]素性を担う助動詞 don't 及び、その潜在的なカウンターパートとしての音形を伴わない法助動詞要素  $\phi$ [IMP]が具現化し、それらが統語論において文タイプを決定する位置として仮定される C<sup>0</sup> 位置へと移動する統語構造分析を提示する。<sup>2</sup>

第三章では、この機能範疇 ModP は、言語間で(5)のようにパラメータ化されると仮定し、この仮説が各言語の命令文の動詞の振る舞いという経験的な側面から実証されうる事を示す。

#### (5) ModP 仮説

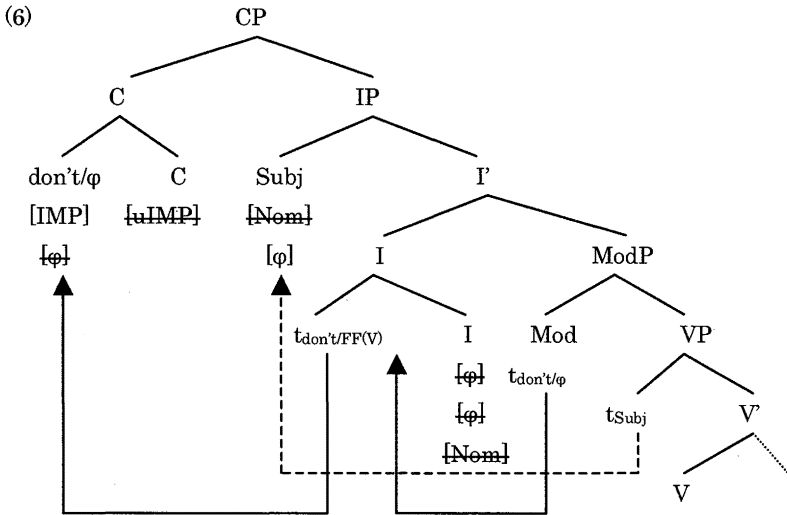
命令文が担う「命令」という発話者のモダリティは、統語構造において、  
(i)機能範疇 ModP の主要部に生起する法助動詞要素、(ii)VP 主要部に生起する本動詞、の何れかに具現化される。

具体的に(5)が意味する事は、各言語の命令文に関して、現代英語の命令文では機能範疇 ModP が投射しその主要部位置に解釈可能な[IMP]素性を担う助動詞要素が現われ、それが C<sup>0</sup> までの移動を起こす。その一方において、古英語～初期近代英語やドイツ語等のように動詞自身が命令法という独自の屈折形態を有しており、それが C<sup>0</sup> 位置まで直接移動を行っているとは仮定される命令文においては本動詞自身が[IMP]素性を担っているという事である。

最後に第四章は本稿のまとめと結語である。

## 2. 英語命令文の統語構造

本章では英語命令文の統語構造に関して分析し、(1)・(3)において示された英語命令文の各特徴が導出される事を示す。具体的には(4)で示した統語構造を踏まえ、解釈可能な[IMP]素性を有する要素を主要部に取り機能範疇として、ModP を仮定し、その範疇が屈折辞句 IP と動詞句 VP との間に投射する、(6)のような統語構造を提案する。



まず命令文には  $I^0$  がその補部を選択する機能範疇  $\text{ModP}$  が投射していると仮定する。この主要部位置には、解釈可能な  $[\text{IMP}]$  素性を担う助動詞要素として、音形を伴わない法助動詞  $\phi$ 、及びその顕在的なカウンターパートの  $\text{don't}$  が生起する。<sup>3</sup> この仮定は、命令文が発話者が「命令」という意のモダリティを有する文タイプである事に拠る。<sup>4</sup> この位置に基底生成する解釈可能な  $[\text{IMP}]$  素性を担う法助動詞  $\text{do}/\text{don't}/\phi$  は、Travis (1984) の主要部移動制約に従いながら  $I^0$  へと移動し、その場で  $I^0$  の解釈不可能な  $[\phi]$  素性と自身の持つ解釈不可能な  $[\phi]$  素性が照合され双方が消去される。<sup>5</sup> 次にこれらの助動詞は、統語構造上で文タイプを決定する位置であると仮定される  $C^0$  まで移動を行い、 $C^0$  における解釈不可能な  $[\text{IMP}]$  素性は助動詞が担う解釈可能な  $[\text{IMP}]$  素性から照合され消去される。<sup>6</sup> また、主語に関しては定形の平叙文や疑問文の主語同様に  $\text{VP}$  内から  $\text{IP}$  の指定部へと移動し、その位置で  $I^0$  と格素性を照合しあうと共に、二人称の人称素性を介する特別な一致関係を形成する。<sup>7</sup>

このような統語分析の利点として、上記(1)-(3)の英語命令文の各特徴が説明できる点が挙げられる。まず(1)の本動詞が原形で生起する特徴に関しては、それが法助動詞要素  $\text{don't}/\phi$  の何れかに後続しているからであり、一般の平

叙文において法助動詞に後続する本動詞が必ず原形で生起しなくてはならない特徴と同様のものと説明される。

(7) She must go /\*goes to school today.

次に否定文の場合に義務的に助動詞 do が生起する(2)の特徴に関しては、英語命令文で現われる法助動詞 don't が解釈可能な[IMP]素性を担った、平叙文において現われる don't とは同音異義の語彙項目であるという点から説明される。英語命令文の助動詞 don't が独立した語彙項目であるという仮定は、それが専ら音韻上の強勢を担い、三人称の主語が生起している場合においても一致を形態的に具現化しないという特徴から支持される。命令文の助動詞 don't が、三人称の主語と一致を生じない法助動詞と同様の特徴を示す事は(8)からも窺い知れる。

- (8) a. Can /\*Cans he speak Japanese well? (Potsdam 1998: 185)  
 b. Don't /\*Doesn't everybody raise his hand at once! (ibid)

また少なくとも命令文に生起する助動詞 don't は、疑問文の場合のそれとは異なり、顕在化する主語と音韻的縮約が不可能な特徴が見受けられる。

- (9) a. Doncha wanna go now? (“Don't you wanna go home?”)  
 b. \*??Doncha hit me! (“Don't you hit me!”) (Akmajian 1984: 16)

このような音韻に関する特徴も、命令文における助動詞 don't の特異性を示しているものと考えられる。

以上のように、三人称主語との形態的一致を示さず、顕在的主語との音韻的な縮約を起こさないという上記それぞれの命令文独自の助動詞 don't の特徴から、英語命令文における助動詞 don't は、平叙文に現われるそれらとは異なる、解釈可能な[IMP]素性を担う法助動詞であり、ModP の主要部位置に生起すると考えられる。本稿ではこれらの法助動詞は否定命令文の場合に

ModP の主要部位置に必ず生起すると考えるので、結果として否定命令文に助動詞 don't が生起する特徴が捉えられる。

また本稿の分析のように、英語命令文に生起する助動詞 don't を、一般の平叙文に現われるそれらとは同音異義の助動詞として見なす事は、これまで英語独自に仮定されてきた統語操作である do 挿入を、少なくとも英語命令文において排除できる点で理論的に好ましい帰結を導き出せると言える。

さて、本稿では解釈可能な英語命令文の統語構造において、ModP の主要部位置に現われる [IMP] 素性を担う助動詞要素として、助動詞 don't と共に音形を伴わない法助動詞要素  $\varphi$ [IMP] を仮定した。このような潜在的な助動詞要素が文法に存在する仮定の妥当性は、Roberts (1985) の仮定法現在の統語構造分析から支持される。Roberts は(10)のような英語の仮定法現在が、(11)のように否定辞 not 単独で否定文が形成され、(12)のように法助動詞や助動詞 don't が生起できないという統語的特徴を示す事を説明する為に、屈折辞句の主要部位置に音形を伴わない助動詞を仮定する分析を提案した。

- (10) a. I demand that he resign immediately. (Chiba 1987: 2)  
b. I suggest that she take a nap. (ibid.)

- (11) a. I require that he be not such a fool.  
b. He suggested that he not finished the work before 10 o'clock.

- (12) a. \*It is imperative that you will/ can/ must/ would/ could/ might leave on time.  
b. \* I suggest that you do not/ don't go alone.

仮定法現在の屈折辞句の主要部位置に音形を伴わない法助動詞が生起しているという Roberts の分析は、これらの例外的な統語的特徴を説明する事が可能である。本稿の英語命令文の統語構造において仮定された  $\varphi$ [IMP] の存在は、Roberts の仮定法現在において仮定された音形を伴わない法助動詞要素と同様の立場を取るものである。<sup>8</sup>

以上、本章では田中 (2003)で提案された英語命令文の統語構造を基底とし、命令文の発話者のモダリティを解釈可能な[IMP]素性として統語構造に具現化する機能範疇 ModP を加えた統語構造を提案した。この機能範疇の主要部位置には[IMP]素性を担う助動詞要素として、 $\phi$ /don't が現われる。これらの助動詞は文法において文タイプを決定する位置であると考えられる CP の主要部位置まで連続循環的な主要部移動を行う。このような分析は、田中 (2003)で説明された英語命令文の主要な特徴を説明する事ができると共に、句構造や統語操作を簡潔にするという側面において、文法理論上好ましい統語構造であると考えられる。

### 3. 機能範疇 ModP の妥当性

先の章では、英語命令文に機能範疇 ModP を仮定する統語構造分析を提案した。それは概略、英語命令文の統語構造には、発話者のモダリティを統語上で具現化する解釈可能な素性[IMP]を担う助動詞が、基底の機能範疇の ModP の主要部から CP の主要部まで移動する結果、それが LF インターフェイス上で解釈されるというものであった。

以上の統語構造分析を行う為に仮定された機能範疇が、解釈可能な[IMP]素性を主要部に担う ModP である。先にもこの ModP という機能範疇を英語命令文の統語構造に擁立する根拠として、命令文が「命令」という発話者のモダリティを表す文タイプである事を掲げたが、本章では機能範疇 ModP が、現在の英語命令文において必要とされるという根拠を、英語命令文の変遷と英語以外の他の言語の命令文の双方の動詞の振舞いから考察する。事実、古英語(Old English: OE)から初期近代英語(Early Modern English: EME)までの英語やドイツ語等の命令文は、本動詞が命令文独自の屈折形態を担っており、それが直接  $C^0$  まで移動する。<sup>9</sup>これは現代英語(Present English: PE)の命令文における本動詞が形態的变化を伴わずかつ  $C^0$  まで移動を行わない事とは対照的である。このような命令文に関する言語間変異を、機能範疇 ModP のパラメータ化をもって説明する。つまり、PE の命令文では機能範疇 ModP が投射し、その位置に生起する主要部位置に解釈可能な[IMP]素性を担う助動詞要素が  $C^0$  までの移動を起こす一方で、OE~EME やドイツ語等の命令

文では、本動詞自身が[IMP]素性を担う。以上の命令文の統語構造に関する ModP のパラメータ化の考えを ModP 仮説と呼び、再度(13)に示す。

(13) ModP 仮説

命令文が担う「命令」という発話者のモダリティは、統語構造において、  
(i)機能範疇 ModP の主要部に生起する法助動詞要素、(ii)VP 主要部に生起する本動詞、の何れかに具現化される。

以下ではこの ModP 仮説を経験的に支持するデータを示し、議論を進める。

3. 1. 古英語～初期近代英語の命令文

まずは OE 期から EME 期までの英語命令文の動詞の振舞いの変遷に関して見る。(14)は OE、(15)は ME、(16)は EME の各命令文の例文である。この中で、OE～ME 期までは本動詞が直接文頭に移動していたのに対し、EME 期には本動詞が直接移動する(16d-f)の様式のもの、助動詞 do が文頭に移動する(16a-c)の様式のもの双方の動詞の移動の振る舞いが確認される。

(14) Old English (Han 2000: 276)

Beo þu on ofeste  
be you in haste  
Be quick!

(15) Modern English (Han 2000: 276)

- a. Helpe þou me.  
help you me  
“You help me!”
- b. medyl ze not wyth hym.  
meddle you not with him  
“Don’t you meddle with him!”

- (16) Early Modern English (Han 2000: 277)
- a. Rather, O God! do thou have mercy on us.
  - b. but I will be your good lord, do you not doubt
  - c. Do you and your fellows attend them in
  - d. And feare ye nott them which kyll the body
  - e. Forbid ye hym not.
  - f. doubte thou not all things rightly ordered be

まず(14)の OE、(15)の ME のそれぞれの命令文に関して、これらの時代は本動詞が主語を越えて文頭に移動する様式を有していた。これは後述する現代ドイツ語等の命令文と同様の特徴であると言える。このような動詞の移動に関する様式が EME 期より変化してくる。文頭に移動する要素として本動詞と共に、その代用表現である助動詞 do が現れ始めてくるのである。

この EME 期が、英語の動詞の屈折の変遷を考察する上で非常に革新的な時代であった事は Roberts (1985)の分析からも理解される。Roberts (1985)は、EME 期を境としてそれ以前の英語では動詞の屈折体系が非常に豊かであり、他方 EME 期以降の動詞の屈折が弱体化していく事実を、動詞と屈折辞との一致の違いに求めた。つまり、EME 期以前の英語では動詞自身が、接辞要素の屈折辞との一致を具現化する為に直接 I<sup>0</sup>位置に上昇する事が可能であったのに対し、EME 期以降では動詞が I<sup>0</sup>位置まで上がる事ができず、その意味的な代替要素としての法助動詞が新たに現われ始め、これが屈折辞との一致を行うようになったと考えているのである。事実、代用表現としての助動詞 do や法助動詞は EME 期以降に現われ始めている。Roberts (1985)の分析をまとめるならば、EME 期を境にして生じる本動詞屈折形態の減少は、本動詞と屈折辞との間の一致から、その代用表現としての法助動詞や do と屈折辞との間の一致へと変化してきた事の現われである。

Roberts (1985)の、動詞と屈折辞の一致の変遷による動詞の移動の変化に関する具体的な統語分析は、現在のミニマリストプログラムの統語理論の枠組みにおいて破棄された統率の概念を使用しているので本稿では取り上げないが、Roberts の一致の変化という示唆を(13)の ModP 仮説に即応させて考

察すると、EME 期以前の英語命令文では「命令」という発話者のモダリティを統語上具現化した[IMP]素性は、本動詞自身が担う事が可能で、それ故に IP 指定部にあると考えられる主語を越えて C<sup>0</sup> 位置まで移動ができたという事になる。また、この当時は[IMP]素性が本動詞自身の形式素性として具現化されていたと考えるならば、この頃の英語命令文の動詞が命令法という独自の屈折形態を担っていた事も説明されうる。

以上の分析を踏まえ、次に英語の Let's 構文に関して考察する。田中 (2003) では、(17)の Let's 構文は (18)の Let us 構文とは異なり、解釈可能な[IMP]素性を担う助動詞 let's を有する独立した命令文の一形式である事を示した。

(17) Let's-construction

- a. Let's go to the park!
- b. Let's see what's at the movies!

(18) Let us-construction

- a. Let us go to the park!
- b. Let us see what's at the movies!

本稿では両者の詳細な統語的相違に関して言及しないが、これまで本稿で提示してきた ModP による統語分析で両者の統語構造を説明すると、Let's 構文は解釈可能な[IMP]素性を具現化する助動詞 let's が ModP の主要部に基底生成し、C<sup>0</sup> へと移動を行う命令文の一形式である。他方 Let us 構文は音形を伴わない法助動詞が C<sup>0</sup> までの移動を行う、一般的な形式の命令文である。

さて、以上のように Let's 構文における助動詞 let's が解釈可能な[IMP]素性を担う法助動詞要素と捉える分析から、その let's の直後に生起する名詞句は IP の指定部に生起する主語名詞句であると考えられる。この名詞句は(19)の対比からも分かるように、Let us 構文においては生起できない。

- (19) a. Let's *you and me* be roommates next year! (Potsdam 1998:267)  
b. \*Let us *you and me* be roommates next year! (ibid)

更に Let's 構文の主語名詞句に関して、その生起は一人称でかつ対格を形態的に具現化している名詞句に限定される。

- (20) a. Let's *you and me* not show up! (Potsdam 1998: 271)  
 b. Let's *US* not be fooled like they were! (ibid)  
 c. %Let's *us and them* challenge the winners! (Potsdam 1998: 267)  
 d. %Let's *all of us* go! (ibid)  
 e. \*Let's *the children* play a little while longer! (ibid)  
 f. \*Let's *those who have cars* leave them here! (ibid)

以上のような現代英語の Let's 構文の特徴を踏まえ、Let's 構文の歴史的な変遷の可能性を探求してみたい。Ukaji (1978)は EME 期には(21)のように一人称代名詞 *we* を本動詞が越えて移動する形式の命令文の存在を示している。

- (21) a. Now brother, follow we our fathers sword, (Ukaji 1978: 123)  
 b. My lord, break we off; we know your mind at full. (ibid)  
 c. And go we. Lords, to put in practice that (ibid)  
 Which each to other hath so strongly sworn. (ibid)

音形を伴う主語の生起に関して、二人称の人称素性を有する名詞句のみを認める PE の命令文の特徴から判断して、これらの命令文は非常に特異である。故に本稿では、PE の Let's 構文と EME の一人称主語命令文が一人称の一致を生じる共通した特徴を備えている点から、両者が同じ特徴を備える命令文であると仮定する。換言すると、(21)のような一人称の主語の一致を示す EME の命令文は、PE では Let's 構文として表されるようになったと考える。

以上のような Let's 構文に関する歴史的な変化を本稿の ModP 仮説に即して説明するならば、命令文独自に仮定される解釈可能な [IMP]素性を担う要素が、EME 期の本動詞から、PE 期の法助動詞 *let's* へと変化してきたという事になる。このような分析はまさしく、上記の英語命令文の歴史的な変遷と平行的な分析である。更にこのような分析は、[IMP]素性を担う独立した

語彙項目として助動詞 *let's* を考える本稿の分析を支持すると同時に、その歴史的な変遷も機能範疇 ModP を仮定する事により容易に説明される。

以上、当サブセクションでは英語命令文の歴史的な変遷を、ModP 仮説を用いる事によって説明した。まとめると、EME 期を境に変化していく命令文の動詞の移動に関する統語的な振舞いは、その統語構造に解釈可能な [IMP]素性を主要部に有する機能範疇 ModP が現われ始めた事に拠るものであると考えられる。つまりは解釈可能な [IMP]素性をその主要部に具現化する機能範疇 ModP の有無によって、これまでの英語命令文の動詞移動の様相の変遷を分析する事が可能となるのである。

### 3. 2. 他言語の命令文

本サブセクションでは、英語以外の言語の命令文に関して、その動詞の特徴に関して考察し、先に示した ModP 仮説の妥当性を検証する事としたい。

まずドイツ語の命令文に関して見てみる。ドイツ語の命令文は、先に示した EME 期以前の英語命令文と同様に、本動詞自身が命令法独自の屈折を有しており、文主語を越えて文頭へと移動する(22)のような形式を有している。

#### (22) German (Han 2001: 300)

- a. Schreib                    du    den    Aufsatz!  
    write.2SG.IMP    you    the    paper  
    "You write the paper!"
- b. \*Du schreib den Aufsatz!

これらの例の対比から、もし主語が英語同様 IP の指定部に位置しているとすると、それに先行している動詞は C<sup>0</sup>にあるものと考えられそうである。

実際にこの本動詞が占める統語的な位置に関して、Han (2001)等の分析によると、その位置は C<sup>0</sup>位置であるという。そこでこの本動詞が C<sup>0</sup>に移動している事を確認付ける Han (2001)のドイツ語の弱形の代名詞目的語の生起位置に関する分析を見てみる。まず、この代名詞目的語が補文内に生起する場合、(23)のように補文標識 *dass* の右側もしくは主語の右側に生起する。

- (23) a. , daß ihm Karl ein Buch geschenkt hat.  
 , that to-him Karl a book given has  
 “..., that Karl has given a book to him.”  
 b. , daß Karl ihm ein Buch geschenkt hat.  
 , that Karl to-him a book given has  
 “..., that Karl has given a book to him.”<sup>1</sup>

特に(23a)では、C<sup>0</sup>位置の補文標識 *daß* の丁度右側を代名詞目的語が占めている。この事を踏まえて(24)に代名詞目的語を含んだ疑問文を観察してみる。

- (24) a. Werden *sich* diese Leute verteidigen?  
 will themselves these people defend  
 “Will these people defend themselves?”  
 b. Werden diese Leute *sich* verteidigen?  
 will these people themselves defend

疑問文の場合でもこれら弱形の代名詞目的語の生起する位置は、(23)の補文におけるそれと同様である。以上の観察から、(24)の疑問文において文頭に移動している助動詞要素は C<sup>0</sup>位置にあるものとする。

さて、このような弱形の代名詞目的語は命令文においても生起可能である。

- (25) a. Schreib es du heute!  
 write.2SG.IMP it you today  
 “You write it today!”  
 b. Schreib du es heute!  
 write.2SG.IMP you it today

(24)と(25)の対比から、弱形の代名詞目的語と前置された動詞、そして主語の語順関係は、命令文と疑問文に関して全く同様である事が確認される。以上の Han (2001)の分析から、ドイツ語の命令文における、文頭に移動する

本動詞は C<sup>0</sup> 位置に位置しているものと考えられる。

このようなドイツ語命令文の本動詞の振る舞い、具体的にはそれが命令法独自の屈折形態を有しかつ文主語を越えて文頭に移動するという統語的な特徴を、本稿の ModP 仮説の観点から説明すると、解釈可能な[IMP]素性の具現様式に関して、英語とは異なりドイツ語の命令文には機能範疇 ModP が投射せず、本動詞自身に[IMP]素性が備わっているという事になる。つまりは発話者のモダリティとしての[IMP]素性を担う本動詞が、基底の V<sup>0</sup> 位置から I<sup>0</sup> を経由して C<sup>0</sup> 位置へと移動を行う結果、ドイツ語命令文における本動詞の命令法動詞としての屈折と文頭への移動として現われるのである。

以上ドイツ語命令文の統語的特徴を、ModP 仮説を用いて説明したが、ドイツ語のように本動詞自身が命令法の屈折を担い、かつ文頭に移動する言語は同様の説明が与えられそうである。実際にこのような特徴を担う言語は比較的多く確認される。

(26) Belfast English (Henry 1995:50-51)

- a. Go you away!
- b. Run somebody to the telephone!

(27) Finnish (Kubo 1997)<sup>10</sup>

- a. Ota            kala  
   take-IMP    fish-OBJ
- b. Ota            sinä            kala  
   take-IMP    you-NOM    fish-OBJ

(28) French (Han 2001: 303)

- a. Faites            le!  
   do-2SG.IMP    it  
   “Do it!”
- b. \*Le faites!  
   it    do-2SG-IMP

(29) Modern Greek (Han 2001: 303)

- a. Diavase                    to!  
     read-2SG-IMP    it
- b. \*To diavase!  
     it    read-2SG-IMP

(30) Italian (Han 2001: 304)

- a. Telefonale!  
     Call-her
- b. \*Le telefona!  
     her call

(31) European Portuguese (Moon 2001: 76)

- a. Lava                    tu                    os    pratos!  
     Wash-2SG    you-SG-NOM    the    plates  
     “You wash the dishes!”
- b. Lavai                    vós                    os    pratos!  
     Wash-2PL    you-PL-NOM    the    plates  
     “You wash the dishes!”

(32) Spanish (Zagona 2002: 53)

- a. ¡Cántalo!  
     sing+CL(Acc.)  
     “Sing it!”
- b. ¡Mándeselo!  
     send+CL(Dat.)+CL(Acc.)  
     “Send it to him/her!”

これらの言語の命令文は、全て本動詞が文頭に移動しその統語的な位置が C<sup>0</sup> であるという点からも、上記のドイツ語の命令文と同様の特徴を有している

と言える。<sup>11</sup>これらの言語の統語構造を ModP 仮説から考察してみると、解釈可能な[IMP]素性を主要部に担う ModP が存在せず、代わりに本動詞が[IMP]素性を担っており、C<sup>0</sup>位置まで移動するという事になる。それ故に、本動詞自身が命令法の屈折形態を有する特徴は、この解釈可能な[IMP]素性を形態的に具現化する事の反映として説明される事になる。

以上、本サブセクションでは本動詞自身が命令法の屈折を担い、文頭の C<sup>0</sup>位置まで移動を行う言語の命令文の統語構造に関して、ModP 仮説を適用する事によって分析を試みた。それによると、このような言語では英語命令文において仮定された機能範疇 ModP が投射せず、解釈可能な[IMP]素性は本動詞自身に備わっており、結果本動詞自身が命令法の形態的屈折を行い文頭の C<sup>0</sup>位置まで移動する事になる。

更にこのように機能範疇 ModP をパラメータ化させるという分析は、福井(2001: 44)が、「(核) 語彙についての言語間変異は、機能範疇に関わるものに限られる。」と述べているように、生成文法におけるパラメータ仮説からも好ましい帰結を導き出す事ができる。

#### 4. まとめ

本稿では英語命令文の統語構造分析を行った。具体的には、その統語構造には発話者のモダリティを示す上で仮定される機能範疇、ModP が投射しており、その主要部位置には don't/let's といった法助動詞が生起する。これらの法助動詞は命令文のモダリティの意を有する解釈可能な素性[IMP]を担っており、それは Chomsky (1995)において示されている、文タイプを決定する上での統語上の位置とされる C<sup>0</sup>位置への移動という統語操作を通じて、統語的な関係が形成される。この結果として、英語命令文が担う文法的特徴が説明される事となる。

以上のような機能範疇 ModP の妥当性に関しては、更なる検証が行われなくてはならない事は自明であるが、少なくとも命令文に関しては、本論文で提示したような法助動詞句をパラメータ化させる分析によって歴史的・言語間的な命令文の特徴を捉える事が出来る帰結は、文法に機能範疇としての助動詞句の存在を認める一端となる可能性を有していると言えよう。

## 註

- \* 本論文の作成に関して、西岡宣明先生と水本豪氏より大変有益なご指摘をいただいた。特記して感謝の意を表したい。また、本稿の内容や例文に関する不備はすべて筆者の責任である。
1. 田中(2003)では、英語命令文において生起する強調の意味を内包する助動詞 *do* も、*don't* と同様に解釈可能な [IMP] 素性を担い、 $C^0$  位置までの移動を行うと考えた。本稿では議論を単純化させる為に助動詞 *do* に関しては言及しない。
  2. Chomsky (1995: 240) では  $C^0$  位置を、文が有する *mood* や *force* を示しその文タイプを決定する統語的な位置と考えている。また Rizzi (1997) では CP を形成する機能範疇として文タイプを具現化する ForceP を仮定している。
  3. 具体的には、助動詞 *don't* が生起せず本動詞が文頭に現われる形式の英語命令文 (“Take care for yourself!” など) では、必ず音形を伴わない法助動詞が生起しており、これが  $C^0$  までの移動を行う。よって、本稿の分析では現代英語の命令文では本動詞の直接的な  $C^0$  位置への移動は存在しない。
  4. 一般の平叙文で法助動詞が現われる場合においても、この機能範疇 ModP は投射していると考えられる。その根拠としては、法助動詞と否定辞 *not* が共起する文において、数量子の解釈上曖昧な解釈が導出される例文が見受けられるからである。例えば (i) では、命題否定 (*not* > *may* の読み) と法助動詞否定 (*may* > *not* の読み) の二種類の解釈が導出される。

(i) You may not go to the party.

この曖昧な解釈を統語上の階層構造において説明する為には、法助動詞と否定辞の各要素の生起位置を確かなものにするべきである。本稿では否定辞 *not* の生起位置に関しては、Potsdam (1998) や Laka (1990) の NegP 分析を採用せず、Ernst (1992) の、否定辞 *not* を副詞類として VP 指定部位置に規定生成させる分析を踏まえ、それが ModP の指定部位置に生起するものとする。法助動詞は本文の命令文の統語構造と同様に ModP の主要部位置に基底生成し、その後  $I^0$  へと移動を行う。この法助動詞の移動の前後の階層構造が数量子の解釈に反映されるという分析を採用するならば、(i) における二通りの数量子句の解釈は導出される事になる。またこのような分析は Chomsky (1995) における、法助動詞を  $I^0$  位置に直接併合させる分

析を棄却する事になる。結果 I<sup>0</sup>位置における時制要素を具現化する統語操作は移動による併合のみという事になり、統語操作の一様化という面においても好ましい帰結である。このような分析に関しての詳細な議論は野村 (2002)を参照。また、ModP を機能範疇として統語構造に仮定する分析としては他に Ouhalla (1990)や Cinque (1999)などがある。

5. 本稿では Radford (1997)の示唆に従い、I<sup>0</sup>はその指定部位置にある主語と一致を起こす[φ]素性と、補部の ModP と一致を起こす[φ]素性の、二通りの解釈不可能な[φ]素性を有していると仮定する。
6. 統語構造において解釈可能な[IMP]素性は C<sup>0</sup>位置まで移動を行い、その後 LF インターフェイスにおいて今井・中島 (1978)の示したような命令文の具体的な意味内容が付与される。それ故統語論における解釈可能な[IMP]素性は、純粋に文タイプのマーカ―としての形式素性であって意味素性ではないと考える。
7. 英語命令文の顕在的な主語の生起の制限に関する、具体的な統語的な分析としては Potsdam (1998)、田中 (2003)を参照。
8. Nissenbaum (2001) は、寄生空所構文や名詞句からの外置の派生を説明する為に文法の潜在的部門において音形を伴わない要素の移動を仮定している。このような分析と本稿の分析を踏まえると、文法の顕在的・潜在的双方の部門において音形を伴わない要素の移動が存在すると考えられる。
9. Zanuttini (1997)や Han (2001)を参照。
10. 元々の例文は、Toivainen (1993)より。
11. それぞれの言語で、本動詞が C<sup>0</sup>位置に移動しているかどうかの詳細な分析は、紙面の都合上本稿では割愛する。

## 参考文献

- Akmajian, A. (1984). "Sentence Types and the Form-function Fit". *Natural Language and Linguistic Theory* 2. 1-23.
- Chiba, S. (1987). *Present subjunctives in Present-Day English*, Shinozaki Shorin, Tokyo
- Chomsky, N. (1995). *The Minimalist Program*. Cambridge, Massachusetts: MIT

- Press.
- . (2001a). "Derivation by Phase," *Ken Hale: A Life in Language*, ed. By Michael Kenstowicz, 1-52, MIT Press, Cambridge, Mass
- . (2001b). "Beyond Explanatory Adequacy," MIT occasional papers in linguistics 20. Cambridge, MA: MIT
- . & H. Lasnik (1977), "Filters and Control," *LI* 8, 425-504
- Ernst, T. (1992). "The Phrase Structure of English Negation," *The Linguistic Review* 9, 109-144
- 福井直樹. (2001). 『自然科学としての言語学 生成文法とは何か』.大修館書店
- Han, C.-H. (2000a). "The Evolution of Do-support in English Imperatives". In *Diachronic Syntax: Models and Mechanisms*, Pintzuk, Susan, George Tsoulas and Anthony Warner (eds.), 275-295. Oxford, New York: Oxford University Press.
- . (2001). "Force, Negation and Imperatives". *The linguistic Review* 18. 289-325.
- Hawkins, J. A. (1986). *A Comparative Typology of English and German*, London: Croom Helm.
- Henry, A. (1995). *Belfast English and Standard English: dialect variation and parameter setting*. Oxford: Oxford University Press.
- 今井邦彦、中島平三.(1978). 『現代の英文法』 (5). 研究者出版
- Kubo, Y. (1997). "Tense and IMP in Imperatives," *Fukuoka Daigaku Jinbun-Ronso* 28-4
- Laka, I. (1990). *Negation in Syntax: on the Nature of Functional Categories and Projections*. Doctorial dissertation, MIT.
- Moon, G. (2001). *Grammatical and Discourse Properties of the Imperative Subject in English*. Doctorial dissertation, Harvard University.
- Nissenbaum, I. (2000). *Investigations of Covert Phrasal Movement*. Doctorial dissertation, MIT
- 野村忠夫.(2002) 「ModP (法助動詞句) 仮説と NegP」. 『論集』第 26 号. 83-108. 青山学院大学大学院文学研究科英米文学専攻
- Pollock, J.-Y. (1989). "Verb Movement, Universal Grammar and the Structure of

- IP". *LI* 20. 365-424.
- Potsdam, E. (1997a). (1998). *Syntactic Issues in the English Imperative*. New York: Garland Publishing Co.
- Radford, A. (1997). *Syntactic Theory and the Structure of English*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Roberts, I. (1985). "Agreement Parameters and the Development of English Modal Auxiliaries," *Natural Language and Linguistic Theory* 3, 21-58.
- Rupp, L. (2003). *The Syntax of Imperatives in English and Germanic*. Palgrave. Macmillan
- 田中公介. (2003). 「英語命令文の統語構造分析」. 『九大英文学』 46号. 191-212.
- Travis, L. (1984). *Parameters and Effects of Word Order Variation*, Doctorial dissertation, MIT
- Ukaji, M. (1978). *Imperative Sentences in Early Modern English*. Kaitakusya, Tokyo.
- Zagona, K. (2002). *The Syntax of Spanish*. Cambridge: Cambridge University Press.